

オニバスが確認された意義

～名古屋でも多くの生きものが生息・生育～

「名古屋市内では絶滅したとされていたオニバスが、20年ぶりに確認された」というニュースは、都市化が進む名古屋の街でも、多くの生きものが息づいていることをあらためて感じさせてくれるものでした。

第一報から発見までの様子を紹介します。

名古屋市内では絶滅とされていたオニバスが、名古屋城外堀で20年ぶりに確認されました。今回の確認に至る3年前の平成21年11月末、オニバスが繁茂していた昭和40年代に作られた植生図を元に、名古屋城外堀で埋土種子(泥の中に眠っている種子)を探す調査をしました。しかし、この時の調査では泥の中から植物の種子を確認することはできませんでした。

そして、それから3年、当時の調査を知る市民の方から「名古屋城外堀で野鳥観察をしていた際にオニバスを発見した」との電話連絡が、なごや生物多様性センターにありました。



オニバスの果実

確認したオニバスの浮葉



名古屋城外堀で確認されたオニバス

翌日の平成24年11月13日、連絡をくださった市民の方といっしょに現場を確認したところ、細々と残る2株のオニバスを名古屋城外堀で確認しました。オニバスは一年草のため、現場を訪れた時点で枯れていたものの、多くの種子を確認することができました。

今回、名古屋城外堀で確認したオニバスの記録を証拠として残すため、採集した葉で標本を作製しました。標本に適した葉が1枚しか残っていなかったこともあり、標本を作る私の手は震えていましたが、貴重な経験ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

都市化が進んだ名古屋市内においても、多くの生きものが生息・生育しています。これらの生きものの中には、身近な自然の変化に関心を持って観察を続けることで見つけられるものも含まれています。なごや生物多様性センターでは、皆さまから身近な自然や生きものの情報を収集し、生物多様性の保全に役立てていきたいと考えております。

(市民協働推進員 中村 肇)

オニバスとは??

オニバス(*Euryale ferox* Salisb.)は、スイレン科オニバス属に属する一年生の水草です。アジア東部とインドに分布し、国内では本州、四国、九州の湖沼やため池、河川などに生育しています。

葉や茎が鋭い刺に覆われていることから鬼蓮(オニバス)の名がつけられています。成長すると葉の直径が0.3～1.5mにもなる日本に自生する最も大きな一年草です。

かつては、農家の人にとってやっかいもの扱いされるほど多くあったと言われています。しかし、ため池の埋め立てや水質の汚染によって生育数が激減し、環境省のレッドリストでは、絶滅危惧II類に位置付けられています。

Interview

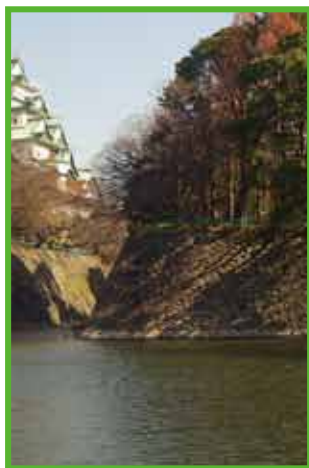
長年にわたり、水草の調査・研究をされている
浜島 繁隆さん(ため池の自然研究会 顧問)に聞く

今こそオニバスが安心できる環境を

名古屋城の外堀に20年ぶりにオニバスが出現したことを聞き、生命力の強さを感じた。1969年の私の「野帳」に、外堀はヒシ、ガガブタ、ハスとオニバスが水面を覆う、と記録している。オニバスは、その後衰退して姿を消した。その原因の一つは、水鳥や鯉に過剰に餌をやり、その結果、アオコが生じる程に汚濁させたことにある。この堀に、かつて、17種類の水草が生育する豊かな水辺であったことを知る人は少ない。絶滅したとされたオニバスは、ヘド口の中で、20年近くじっと耐えて生き永らえ、今年、そっと外の様子を覗くように顔を出したように思える。今こそ、オニバスが安心できる環境にしないと考える。



オニバスが水面を占有する1967年の名古屋城外堀
(写真提供:浜島 繁隆さん)



現在の名古屋城外堀
(撮影:市民協働推進員 中村 肇)

なごやの生きものたちの今を伝える

安価なペットのカメは捨てられる?

名古屋市内の野外で確認された外来カメ類について創刊号で紹介しましたが、今号でも市内で新たに見つかった外来カメ「カプトニオイガメ」について紹介します。



カプトニオイガメ(奥がオス、手前がメス)

鉄兜を思わせる甲羅の形が特徴的なアメリカ合衆国南部原産のカメで、平成24年6月に緑区の神沢池を調査してい

た際、成熟したオスとメス各1個体ずつ捕獲しました。今のところ日本の野外で繁殖したという例は知られていませんが、越冬が可能なため、日本に定着する可能性があります。ため池などで増えてしまえば、貝類などを好む性質から、在来水生生物にも様々な影響を与えるでしょう。

ペットのカメがなぜ捨てられるのか?非常に難しい問題ですが、捨てられるカメ類に共通する特徴のひとつは、比較的低価で購入できることです。日本はペット輸入大国であり、ペットとして多種多様なカメ類が毎年大量に輸入されています。捨てられる外来カメ類は、子ガメが数千円以内で購入できるもので、決して何万円もするような高額なカメは見つかりません。このあたりにペットの外来カメ類の遺棄を防ぐ鍵があるのかもしれませんが、日本に定着する可能性のあるカメ類を安価に購入できる現在の状況を、今後、変えていく必要があるのではないのでしょうか。

(市民協働推進員 宇地原 永吉)

第14回日本カメ会議で名古屋の成果を発表

12月8、9日に東京で開催された「第14回日本カメ会議」で、「名古屋市における外来カメ類の防除活動と在来カメ類の保全」と題したポスター発表を行いました。

当日、多くの質問を受けたのは、協議会ミシシippアカミガメ対策部会のメンバーが作成した「浮き島型カメ罠」についてでした。これは、ミシシippアカミガメを選択的に捕獲できるということで関心が集まったようです。今後もセンターでは、名古屋で得られた成果を幅広く発信していく予定です。



外来カメ防除の成果を説明する

(市民協働推進員 野呂 達哉)

自然の恵みいただきます ～ビオトープ田んぼの1年～

名古屋市港区の農家や地元の皆さんのご協力を得て取組んできました、無農薬で、生物多様性に配慮した「ビオトープ田んぼ」。ここは生きものいっぱいの田んぼで、お米を作るだけでなく、水田に棲む生物の調査、主にお子さんを対象とした生きもの観察や稲作体験、お米や稲藁を活用する事業を行ってきました。

今年度も1年を通して、多くの市民の皆さんに体験・体感をいただきました。

春

4月。田んぼ事業始動の前に、講師の高山博好さんから田んぼに棲む生きものについてお話していただき、生物多様性センターで種まきをしました。

2カ月近く、センターで大切に育て、いよいよ田んぼで「田植え」です。はじめて、田んぼに足を踏み入れたお子さんたちは、簡単には歩けません。土の感触を感じながら、ゆつくり一歩一歩踏みしめて、一株一株丁寧に植えます。カエルなど田んぼの生きものにも出会いました。

夏

泥だらけ、汗まみれになって、田んぼの草取り。ビオトープ田んぼでは、除草剤を使いません。みんなで一生懸命、作業をしました。カマキリみつけ。生きもの達も顔を出してくれました。

秋

収穫した餅米(マンゲツモチ)は、藤前干漏ふれあいデーの会場で、名古屋市公式キャラクターの「はち丸」君や名古屋おもてなし武将隊の皆さんにも参加いただき、賑やかに餅つきをしました。多くの皆さんが自然の恵みに満足。

また、脱穀後(お米をはずした後)の稲藁も無駄にはしません。「紙すき」をしました。紙すきといっても、高級な和紙を工房ですくのではなく、脱穀した後の稲藁をなごや生物多様性センターの会議室ですきました。一定の年代以上の方には「わら半紙」として、テスト用紙などでお世話になった懐かしいものかもしれません。藁も、肥料として田畑に梳きこむ他、リース作りなどの工作や納豆づくりなど工夫次第で活用できます。



バケツ稲

ご家庭で簡単に田んぼ体験

田んぼでの稲作りは誰にでも体験できるものではありませんが、企業やご家庭、幼稚園・保育園、学校などで、比較的気軽に取組める方法として「バケツ稲」があります。バケツでお米を育てる体験ができるだけでなく、バケツに集まる生きものの観察もできます。

なごや生物多様性センターでは、そのマニュアルを作りました。バケツの中でも多くの生きものを観察することができます。是非、取組んでみませんか?

http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/biodiversity/material/baketsuine_manual.pdf

(イラスト:高山 博好さん)



生きもの観察

種まき

Summer

はざかけ(天日干し)

稲刈り

餅つき

紙すき

Autumn